蔦谷栄一の異見私見

津波に消えた町のむかしの暮らし

つい先日、仙台に講演のため足を運んできたが、せっかくの機会でもあり、小学校時代の恩師にお線香をあげるとともに、奥様の早坂泰子さんのお話をうかがってきた。

3・11大震災にともない、全国からたくさんの支援や励ましが寄せられたが、地元の河北新報社はこれに感謝する「ありがとうの詩」を募集。460もの応募作品の中から、宮城県名取市の閖上（ゆりあげ）のご出身である早坂泰子さんが書いた「ふるさと閖上」は、その最優秀作品に選ばれている。また私のギター弾語りの師でもある原荘介は、やはり早坂泰子さんの書いた詩「海の見える町」に曲をつけて歌っており、CDにもなっている。

早坂泰子さんは、みやぎ民話の会のメンバーであり、長年にわたって各地を訪れては古老から昔話を聞き、これを記録してきた。それが3・11以降は、故郷である漁師町・閖上の「何世代にもわたって脈々と受け継がれてきた、この形のない、心の遺産とでも言えるのでしょうか。閖上の個性を、次の世代へ、しっかり受け渡して」おきたいとして、この町で暮らしてきた人たちを訪ねての聞き書きに取り組んできた。これらは冊子『閖上―津波に消えた町のむかしの暮らし』として、既に2014年の夏に発表されており、筆者にもお送りいただき、大事に本棚に並べてある。今でも何かあると思い出しては、頁をめくっている。

早坂泰子さんとの話は自ずと閖上の話になったが、昔はここでどれぐらいたくさん魚が獲れたかについての漁師の話だとして語ってくれたのが「きんき」の漁である。きんきは「きちじ（喜知次）」が正式名称のようであるが、金目鯛とよく似てはいるものの、キンメダイ科ではなく、カサゴ科だとかで、まったく別の魚であるが、今では金目鯛の3倍もの値段がつく高級魚とされるようだ。姿はきれいな朱色で、脂肪の多い白身魚であるが、醤油で煮つけたきんきは絶品で、魚を食べた後に残った煮汁をご飯にかけるとこれがまたうまい。このきんきを獲るために網を絞っていくと、たくさんのきんきで海は朱色に染まるとともに、飛び跳ねるきんきで、まるで海に大きな朱色の花が咲いたようであったそうだ。

続いて話は、いわゆる大漁歌い込みとして知られる斉太郎節が変化して歌われるようになった、閖上大漁節へと移った。「今朝の日和は　空晴れ渡り　波静かエーアラエーエノソーリャ　またも大漁だエー／船出せ出せと　乗り子もそろい　出ていくエーアラエーエノ　ソーリャ　またも大漁だエー」これを漁師たちは櫓を船板にぶつけて音を出して調子をとりながら勇壮に歌ったそうで、どんどん即興で歌詞を変えながらいつまでも歌は続くのだそうだ。早坂泰子さんが身ぶり手ぶりで櫓を漕ぐようにして語るのについつい引き込まれ、にぎやかで活気があり、魚の臭いの染み込んだ閖上にいるような気分にさせられた。

再び元の町に戻ることはないが、そこに住んで生活を築いてきた人々の暮らしを伝えていくことは次の世代へのメッセージとなるだけでなく、深い傷跡を少しは癒してくれるのではないか。同時に真の復興には長い時間を要することを思い知らされたような気もした。

（農的社会デザイン研究所代表）